



平成18年度 琉球大学附属図書館貴重書展

琉球・沖縄の歴史と文化を探る



主催：琉球大学附属図書館 共催：北谷町立図書館

後援：北谷町教育委員会

企画：琉球大学附属図書館研究開発室

琉球大学附属図書館貴重書展

「琉球・沖縄の歴史と文化を探る」

沖縄戦（1945年）は幾多の人命を奪っただけでなく、かけがえのない文化遺産をも破壊した。それゆえに、戦後沖縄の文化活動は、焼け残った資料をかき集め、破壊された文物を修理・復元し、乏しい予算を準備して必要資料を購入するなど苦勞の多い道程となった。「沖縄とは何か」という問いに答えるためには、語り部とも言うべき沖縄に関する情報を地道に蓄積し、それを共有できる状況を構築する必要があったのである。琉球大学附属図書館もまたその事業の一翼を担って活動し続けてきた。

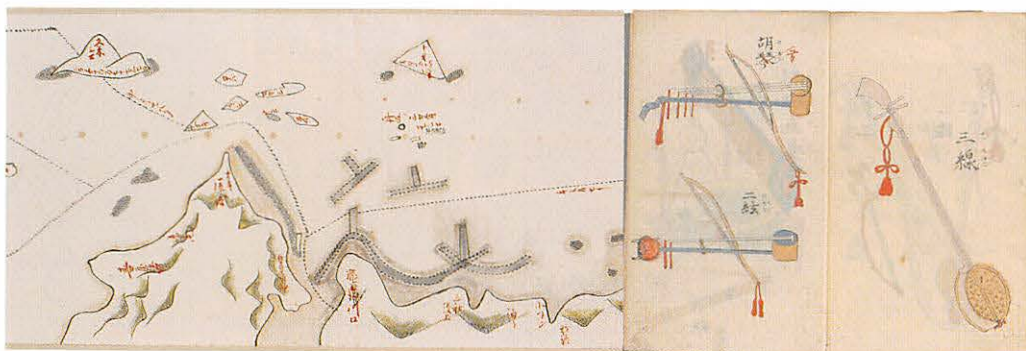
琉球大学附属図書館は、沖縄がかつて琉球王国という独自の体制を形成して歴史を歩んできた時代の語り部を数多く収集している。例えば、王国時代の祭祀・儀礼の世界を今に伝える「おもろさうし」「冬至当日之公事」「年中儀礼」や、王国の文化状況を伝える「恩河本・小禄御殿本組踊集」「屋嘉比工工四」「琉歌輯」、王国時代に活躍した蔡温の「蔡氏具志頭親方文若案文」、宜野湾朝保の「沖縄集」などがそれである。王国と中国の交流史を伝える「指南広義」「周煌の掛板」、王国と薩摩・将軍の関係を伝える「島津家宛花押印状」「首里（中山）王府花押印状」「琉球人行列附」「琉球人行列図」、王国と奄美（具体的には沖永良部島）の関係を伝える「渡琉日記」、イギリス人ベッテルハイムが聖書を琉球語に訳した「琉球語新訳全書」などを収集している。

王国時代の語り部だけではなく、琉球処分（沖縄県設置、1879年＝明治12）以後の近代沖縄に関する資料も収集している。例えば、置県初期に日本語を学ぶために使われたテキスト「沖縄対話」、基幹産業として躍進する糖業の品質管理を目指した通達「製糖取締旧慣内法」、大正時代に刊行された雑誌「南鵬」、あるいは「沖縄写真帳」「栗原自然科学研究所移民調査写真集」などを収集している。その他に、「甘藷百珍」「琉球游记」「銅刻琉球国全島図」などの貴重書も収蔵している。

これらの貴重資料を広く県民・市民に公開することによって、琉球・沖縄の歴史と文化を伝える語り部たちがどのような表情をしているか、彼らが私たちに何を語りかけているのか、について知る機会を提供したい。語り部たちが語る言葉・情報を吸収することを通じて、多くの人々が、この島の歴史・文化の奥深さを実感していただきたいと切に願う。

2006年10月

琉球大学法文学部教授
高良倉吉

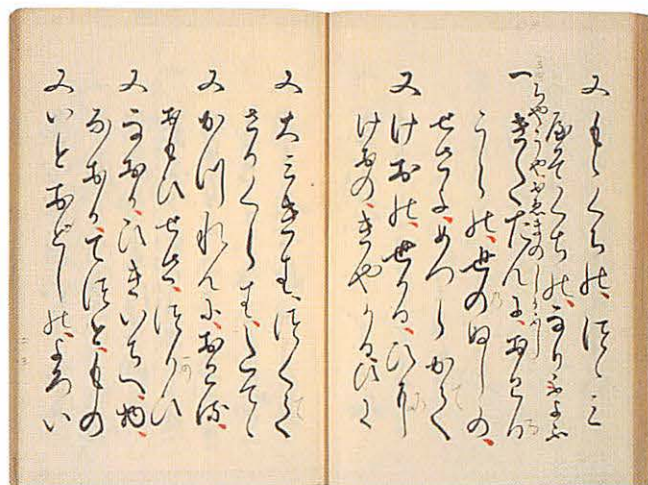


書誌事項の[写]は自筆本・書写本等、肉筆の資料を示す。

なかよしほん
1 仲吉本『おもろさうし』

〔写〕 7冊 27×19.3cm 明治32年頃？
(伊波普猷文庫)

古琉球期の歌謡集。全22巻、1554首のおもろを収録し、古琉球期を知る有力な資料の一つである。北谷のおもろは巻十五にまとめられている。北谷間切は現在の北谷町と嘉手納町域にあたるため、その中には「きたたん（北谷）」以外に、「やら（屋良）」や「やらざたけ（屋良座嶽）」といった嘉手納の地名も歌われている。『おもろさうし』は1710年に再編された際に二部作成され、尚家とおもろ主取家である安仁屋家に伝えられたため、尚家本と安仁屋本系統とに別れる。仲吉本は仲吉朝助が所有していた安仁屋本系統の写本。（前城淳子）

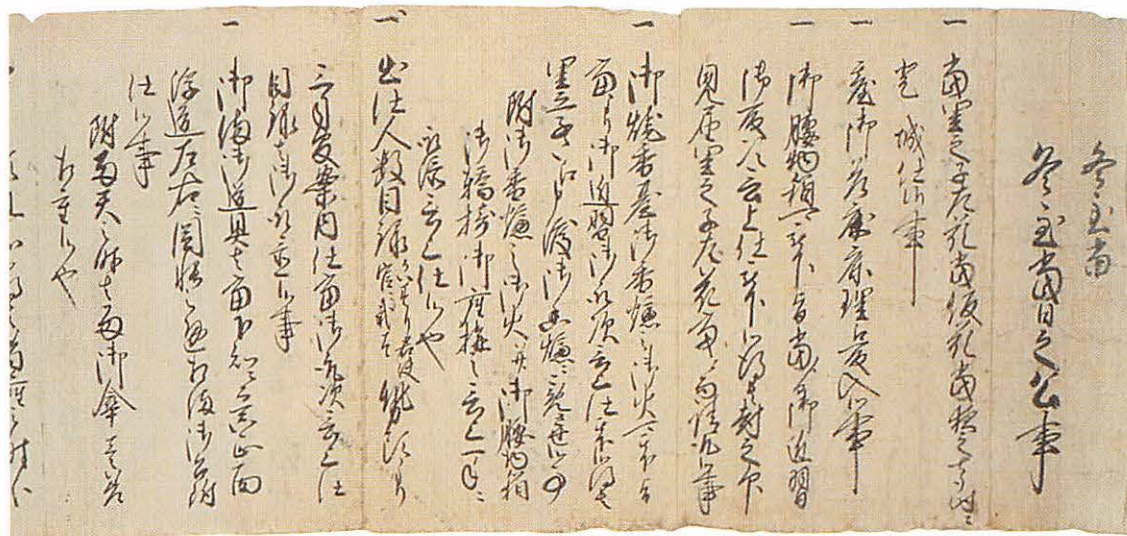


1 仲吉本『おもろさうし』

とうじとうじつ の くじ
2 冬至当日之公事

〔写〕 巻紙 15.5×226cm 年代、作者不明（伊波普猷文庫）

冬至の日に首里城正殿前の御庭（ウナー）で行われる儀式に関する文書である。18の条文（一つ書き）からなる。冬至儀礼は正月元日と同一。まず、御庭の北殿側に御拝座が設置され、国王を始め王府官人ら一同は北に向かって行う「子(ね)の方」（紫禁城）の遥拝儀礼を行う。次に国王は正殿二階に移動し、諸官人らは唐玻豊に向かって国王を拝礼する「朝の御拝」を行う。本史料は、冬至の朝3時頃から準備を始めていること、国王の移動の際には太鼓を打ち鳴らしていること、儀礼担当役や三司官らの拝礼の所作が詳しく記述されている。（豊見山和行）

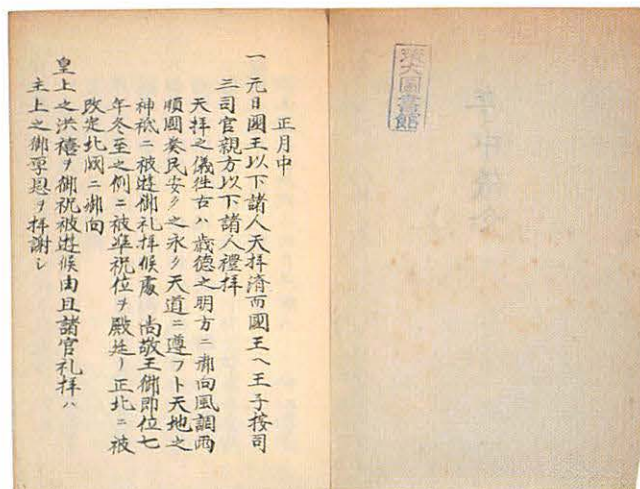


2 冬至当日之公事

3 年中儀礼

〔写〕 1冊 19枚 27.7×19.5cm 筆者名、奥付け共に無し（伊波普猷文庫）

正月元旦から、12月除夜までの、主に首里王府内の行事について、月ごとにその行事の由来と内容を記録したもの。写本の末尾に「右旧記由来記球陽其外諸書見合取調部如斯御座候以上」（右は、旧記、由来記、球陽其の外の諸書見合せ取調べ、斯の如く御座候、以上）とあるところから、記述の内容は、穏当なものと言える。（上里賢一）



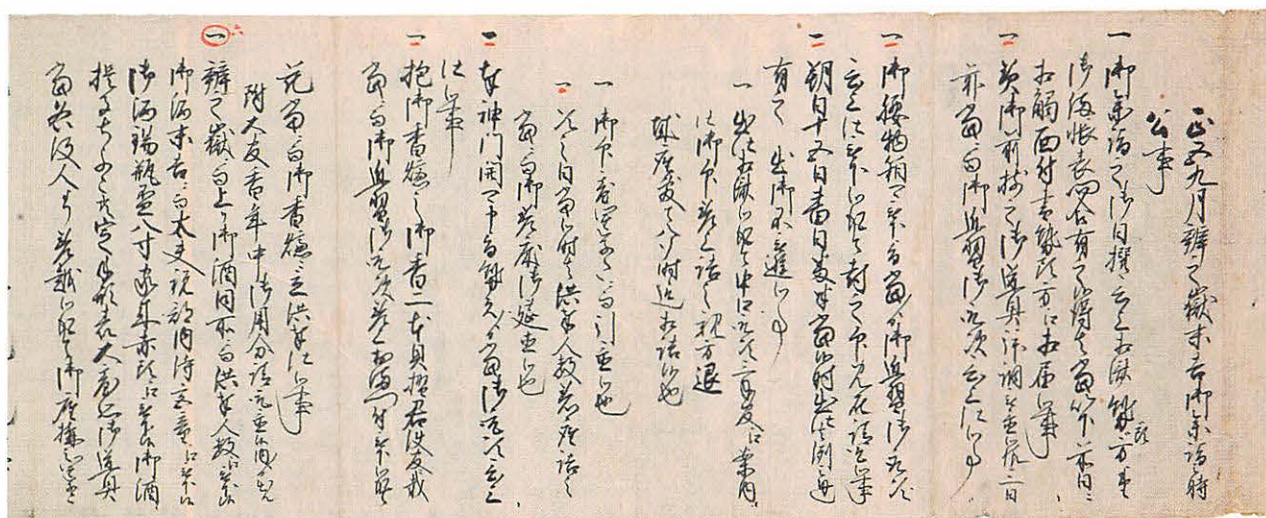
3 年中儀礼

4 正五九月弁之嶽・末吉御参詣之時公事

〔写〕 巻紙 16×234cm 年代、作者不明（伊波普猷文庫）

国王による寺社（御嶽を含む）への参詣儀式に関する文書である。目的は、国王の長命、王族の繁栄、琉球国の安穏を祈願することにあつた（「琉球国由来記」巻1）。本文書は、首里城内の首里森御嶽、園比屋武（そのひゃん）御嶽を巡拝し、弁の嶽での儀式を中心に記述されている。弁の嶽（大嶽・小嶽）での儀式において、三平等の大阿母しられ等によるオタカベが唱えられるなど、古琉球以来の神女による伝統的な神事が行われていたことが分かる。「由来記」には見られない貴重な内容である。

（豊見山和行）



4 正五九月弁之嶽・末吉御参詣之時公事

や か び くんしー や か び ちようき
5 屋嘉比工工四 / 屋嘉比朝寄 [編]

[写] 1冊 44丁 28.5×21cm 沖縄県指定有形文化財
(伊波普猷文庫)

屋嘉比朝寄(1716~1775)が編んだ琉球古典音楽の楽譜。
117曲を収録。屋嘉比は中国の楽譜を参考に三線の記譜法
(工工四)を考案し、それまで口承で伝えられてきた琉
球音楽を集成した。本書はその原本。三味線の旋律符号
を列記したそばに歌詞をカタカナで付記し、三味線を伴
奏にして弾き歌いできるような方法がとられている。く
書き流し工工四とも言われる。真境名安興から伊波普
猷に渡し、本附属図書館に収められた。

(琉球大学附属図書館)



5 屋嘉比工工四

おん が ほん お ろく どうんほんくみ おどりしゅう
6 恩河本・小禄御殿本組踊集

[写] 1冊 266丁 27.5×20cm

小禄御殿に伝えられていた組踊集(小禄御殿本)を明
治31年(1898)に恩河朝祐が写したもの。組踊を愛した
母親の気持を子々孫々に伝える目的で筆写したと恩河は
記している。目次に22作品の名が挙げられており、その
順番に従って「巡見之巻(じゅんちんぬかん)」から「屋
慶名大主敵討(やけなうふぬしていちうち)」までの22
組の組踊の脚本が漢字とカタカナを基本に記述されている。
組踊は琉球芸能を代表するものだが、その研究に欠かせ
ないテキスト資料の一つである。なお、作品「雪払(ゆ
ちはらい)」のみは重複して筆写されている。(高良倉吉)



6 恩河本・小禄御殿本組踊集

りゅうかしゅう き な し
7 琉歌輯(喜納誌)

[写] 1冊 67丁 7.5×12.5cm 1875(光緒元)年

四句三十音からなる琉歌を集めたもの。表紙に「光緒元/琉歌輯/朝公」、表紙裏に「喜納誌」と記
されている。1丁オモテから55丁オモテまでに577首の琉歌を収める。琉歌集は三線にのせて歌うため
の歌詞を節名ごとに分類配列した節組琉歌集が主流であるが、この歌集には節名は記されておらず、
文学として読んで楽しむために編まれたものである。朱書きで作者名が記されている歌があることや、
他本に見られない歌も数多く収録しており、琉歌の資料として貴重である。(前城淳子)



7 琉歌輯

8 蔡氏具志頭親方文若案文

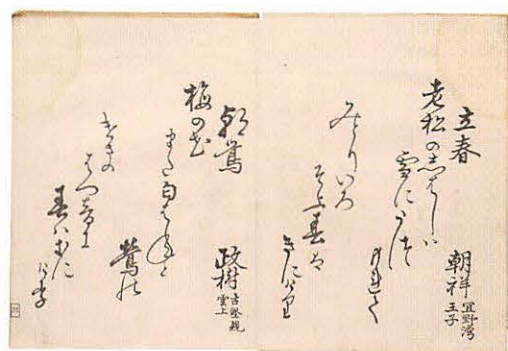
[写] 縦帳 墨付き 13丁 26.3×19.5cm 年代不明 (1757年旧4月以降頃か) (伊波普猷文庫)

蔡温 (1682~1761) の「自叙伝」に同じ。本書は冒頭の数丁を欠く。16歳の頃、小橋川仁屋に罵倒され勉学に奮起する契機となった一件から始まる。進貢存留役で福州へ渡り、同地で湖広の隠者と出会い学問の「秘旨」を伝受されて実学に目覚めたこと、長史・正議大夫役への昇進とその功績、尚敬王の師匠役となったこと、特に1719年に来航した冊封使 (海宝・徐葆光) 一行への対応で苦慮した「評価事件」 (冊封使節団の積載商品の買上をめぐるトラブル) での八面六臂の活躍を詳記する。蔡温の人物像を知る上で貴重な史料である。(豊見山和行)

9 沖縄集 / 宜湾朝保 [編]

1冊 22丁 26.2×18.8cm 1870 (明治3) 年

宜湾朝保 (1823~1876) が編集した和歌集。36人の和歌を1首ずつ収めたもので「沖縄三十六歌仙」とも言われる。鹿児島藩を通じて大阪の書肆弘濟堂から出版されており、序文を朝保の師である八田知紀が、跋文を歌友の樺山資雄が書いている。「立春」から「庭上鶴」まで、四季、恋、雑の順に歌が並べられ、さらに四季歌は季節の推移にそった細やかな配列がなされている。筆跡は朝保のもので、散らし書きによる流麗な筆跡で書かれている。沖縄県立図書館に所蔵されている『沖縄集』と内容や構成は同じだが本の装丁は異なる。(前城淳子)

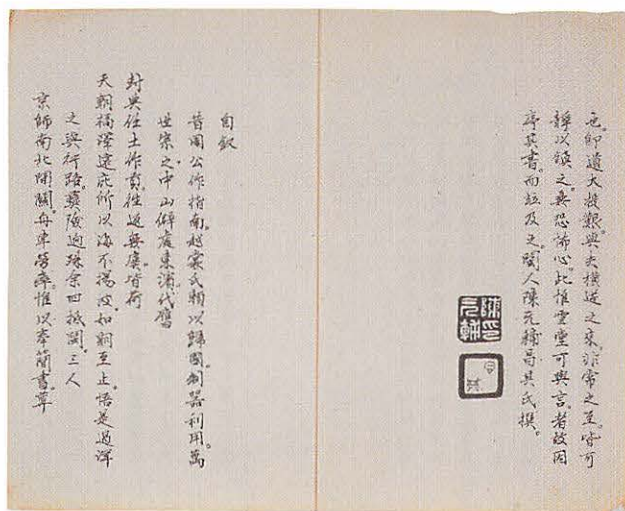


9 沖縄集

10 指南広義 / 程順則 [著]

1冊 58枚 26.2×18.8cm 1708 (康熙47) 年
中国瓊河柔遠駅刊本写本 (仲原善忠文庫)

『指南広義』は、程順則 (1663~1734) が康熙47年 (1708) に中国瓊河の福州琉球館 (柔遠駅) で版行した那覇一福州間を往来する貢船の航海に供するための指南書である。針路については、康熙22年 (1683) に冊封のために派遣された冠船の羅針盤主掌蛇工から伝授された羅針盤を用いた航海針法と、久米三十六姓の伝える針法に基づいている。航海の針路以外に、内容は航海神の天妃に関する「天妃靈応記」、暴風や風向きに関する「風信考」、船荷の装載や船出の吉日を記した「行船通用吉日」、航海の飲食飲酒に関わる「飲食雑忌」「戒波飲酒」等多岐にわたっている。以後、進貢船や接貢船派遣の際の必携の書となった。琉球の海事思想を知る上での一級史料である。(赤嶺守)



10 指南広義

11 周煌の掛板

38.5×147cm

旧天王寺が収蔵していた冊封使周煌の七言律詩掛板。「丙子九月」は、作者の周煌 (? ~1785) が尚穆王の冊封のため正使全魁とともに渡来した年 (1756年・乾隆21年) である。天王寺は、首里の三大寺の一つに数えられた名刹であるが、明治期に廃寺となっており、遺品がほとんど残っていない。

この掛板は、数少ない遺品の一つであり、貴重なものと言える。
(上里賢一)

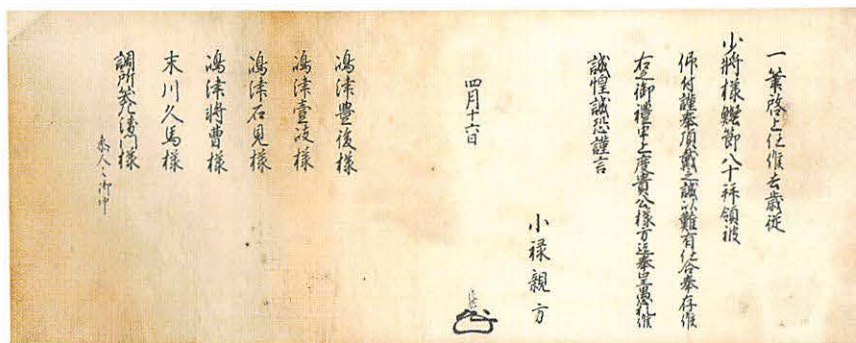


11 周煌の掛板

12 島津家宛花押印状の内、島津家家老衆宛て
小禄親方の書状

[写] 原本 一紙 19×47cm 年代不明 (1845~1847年頃か)

小禄親方良恭 (三司官、1839~1847年任職) から島津家の家老衆へ宛てた書状である。内容は、「昨年、島津少将から鯉節八十本の贈与を受け、誠にもって有り難き仕合わせである。その御礼を申し上げたいので、家老の皆様がたへ愚札 (書状) を差し上げた次第である」というものである。琉球国王を始め摂政・三司官などの王府高官と薩摩藩主および家老らとの進物のやり取りは頻繁であった。また、鯉節は高級な贈答品として用いられていた。(豊見山和行)

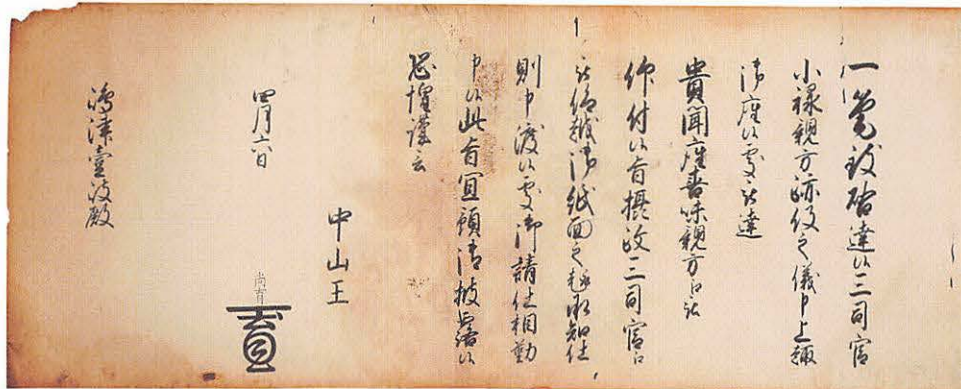


12 島津家家老衆宛て小禄親方の書状

13 首里（中山）王府花押印状 三通の内、4月6日付の中山王尚育より島津壱岐宛ての書状

[写] 原本 一紙 21×52cm 年代：1847（道光27、弘化4）年

尚育王(1813～1847)から薩摩藩家老へ充てた手紙である。大意は、次の通り。「三司官（小禄親方）の後任人事として、座喜味親方を薩摩藩へ要請したところ、薩摩藩主から許可する旨の返答が摂政・三司官へあり、そのことを承知した。それで即座に（私＝尚育より）その旨を座喜味へ伝えたところ、受諾して（三司官役を）勤めている。以上のことを宜しくご披露して頂きたい」。国王の直書（じきしょ）であること、三司官の後任人事の方法（国王から薩摩藩へ申請し、その許可を得て改めて国王によって三司官を任命する）が簡略ながら示されている点で貴重である。（豊見山和行）



14 琉球人行列附

軸物 25×137cm 版元／平野屋助三郎・大木屋平右衛門 画工／歌川国芳 1832（天保3）年刊

江戸上りは徳川将軍や琉球国王が代替りをしたときに行われ、徳川将軍の襲職を慶賀するための使者を慶賀使、琉球国王の襲封を恩謝するための使者を謝恩使といった。江戸上りのはじまりは、寛永11年（1634）の尚豊王襲封の謝恩使派遣で、最後は嘉永3年（1850）の尚泰王の襲封を恩使する派遣、計18回行われている。天保3年は尚育王の襲封を恩謝するための派遣で、正使豊見城王子が薩摩で死去したため普天間親雲上が代役をつとめた。通常、島津氏の参勤交代にあわせて江戸参府をするが、この年は島津斉興の参勤交代の際にとりおこなわれた。（赤嶺守）



15 琉球人行列図（錦絵）

5枚 19×26.5cm 版元／不明 1832（天保3）年刊

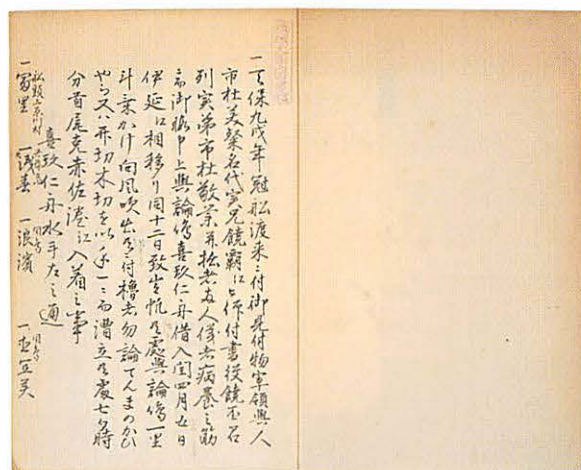
「江戸上り」の使節は主要な町や城下町に差し掛かると、わざわざ唐装束に着替え、路次楽を奏して通過している。江戸時代は日本全体が「有髭」の中世とは異なり髭をはやさない「無髭」社会となっていたが、琉球士族は中国的な鬚髭（しゅし）を蓄えていたことから、それがまた見物する人々に「異国」としての琉球を強く感じさせ、人々の興味を誘い、各地で見物の人混みができていた。天保3年は、多くの琉球物刊本が刊行され琉球ブームを巻き起こした年で、錦絵はそうしたブームに煽られてか、少々誇張気味である。（赤嶺守）



16 渡琉日記

〔写〕 縦帳 1冊 墨付き22丁 28×20cm 記主はノ葉（へつよう）、後に操坦晋（みさおたんしん） 年代；1838（道光18、天保9戊戌）年（伊波普猷文庫）

「戊（いぬ）の御冠船」と呼ばれる尚育冊封（1838年）に関連して、沖永良部島へ割り当てられた上納物（鶏27羽、玉子652個、豚84疋）を運搬してきた際の旅日記である。ノ葉（1800～1861）らは同年閏4月5日に出港したものの、海上での遭難によって豚を投棄したため、その分を代銭で上納した。那覇滞在中は、中国人の林增高および豊見城按司らの宴会に同席して漢詩の添削を受けたり、和歌・琉歌の詩作をやり取りする宴会に赴くなど盛んに琉球役人と交流していた。また、中国人医師に実母の治療法の手ほどきを要請したり、崇元寺での論祭礼を見物した後、



16 渡琉日記

6月29日に帰路につき、7月12日に帰島した。冊封使節一行との交流のあり方、ノ葉ら沖永良部役人らの教養の高さを示すものとしても他に見られない重要な日記である。

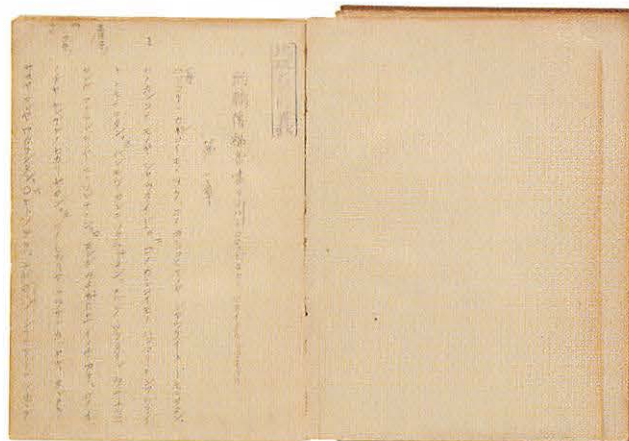
(豊見山和行)

りゅうきゅうご しん やく ぜん しよ

17 琉球語新訳全書

〔写〕 2冊 22.8×15.5cm (伊波普猷文庫)

王国末期、琉球に滞在しキリスト教の布教活動を行ったイギリス人ベッテルハイム(1811～1870年、漢字名は「伯徳令」)が聖書を琉球語に訳したもの。背文字には「琉球語新約全書」と表記され、別名「琉訳聖書」とも呼ばれる。ルカ伝(路加伝)とヨハネ伝(約翰伝)の二つの福音書と使徒行伝(聖差言行伝)、ロマ書(保羅寄羅馬人書)が訳されている。全文カタカナ表記。1冊目の冒頭「ハジマリニ、カシコイモノヲテ」(始まりに、賢い者をて)に見るように、日本語をベースにしながら「ヲテ」といった琉球語の言い回しを多用する方法をとっている。(高良倉吉)



17 琉球語新約全書

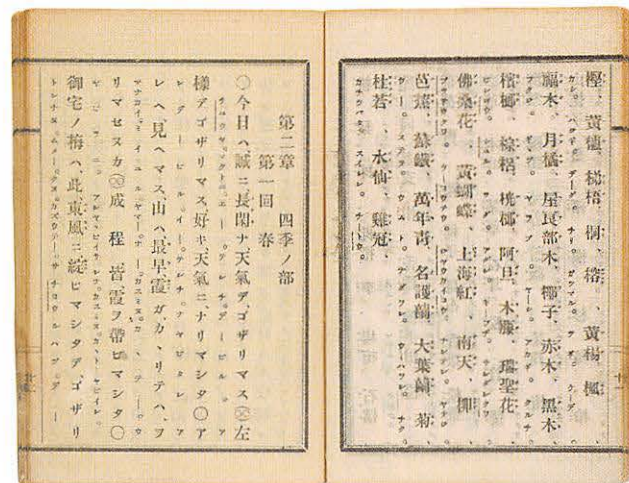
おきなわたいわ

18 沖縄対話 上下巻

2冊 22.7×15.4cm 1882(明治15)年

再版(沖縄県蔵版)(仲原善忠文庫)

『沖縄対話』は、沖縄県学務課が編纂し、1880年(明治13)12月に発行した共通語＝大和口と方言(首里方言)の対訳を並記した教科書である。本書は明治15年の再版本である。小学校では、修身、読書、作文、習字、算術、地理、歴史、会話等のカリキュラムがあったが、『沖縄対話』はその会話科の教科書として用いられていた。小学校のみならず中学・師範学校においても会話科の教科書として『沖縄対話』は使用された。上巻は名詞之部、四季之部、学校之部、農之部、下巻には、商之部、遊興之部、旅行之部、雑話之部があり、日常使われる会話を想定した教科書であったが、それは同化教育の開始を意味するものであった。(赤嶺守)



18 沖縄対話

せいとう とりし まりあうかん ないほう
19 製糖取締旧慣内法

1冊 6枚 19.5×14cm 1888（明治21）年
（仲原善忠文庫）

8月に那覇糖商組合事務所が刊行した砂糖製造に関する冊子。明治18年に県が通達した取締り規定の趣旨を周知徹底させる目的で印刷、配布された。琉球処分（沖縄県設置、明治12年）後に製糖業は沖縄の基幹産業として発展するが、その過程において粗悪品が出回り、沖縄産のイメージダウンをもたらした。その問題を解決する目的で、間切・村の役人や製糖関係者による監視体制を強化し品質管理を徹底させること、違反者には「過料金」（罰金）を課すことなどが細かく規定されている。近代糖業史を考えるうえで貴重な資料である。（高良倉吉）



19 製糖取締旧慣内法

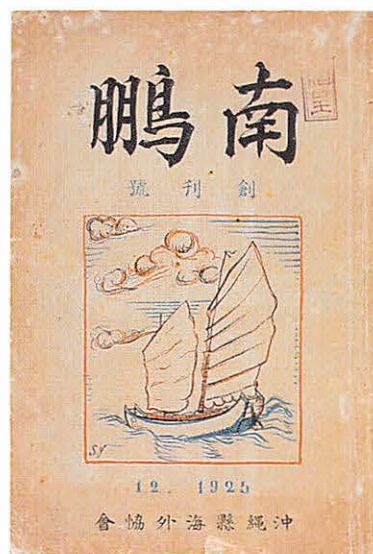
なん ほう
20 南鵬

15×22cm

「南鵬」創刊号（大正14年12月）、第2巻1号（大正15年12月）、沖縄県海外協会発行

国策にそって、海外移住を支援するために結成された協会の機関誌。亀井光政知事が会長となり、県内務部長・警察部長が副会長、県議会議長・貴族院議員が理事、評議員には、伊波普猷、山城正忠らの名前も見える。大正7年頃から結成が提唱されていたという。全国的には、広島、山口等7県に次ぐものであった（亀井会長挨拶）。

評論、海外通信、詩歌、俳句、感想（随想）、創作等を掲載する総合雑誌。創刊号には真境名安興（県立図書館長）の「バージルホール渡来に関する琉球側の記録」、伊波普猷（文学士）の「沖縄の俚諺とデモクラシー」、山城正忠の詩歌が掲載されている。（上里賢一）

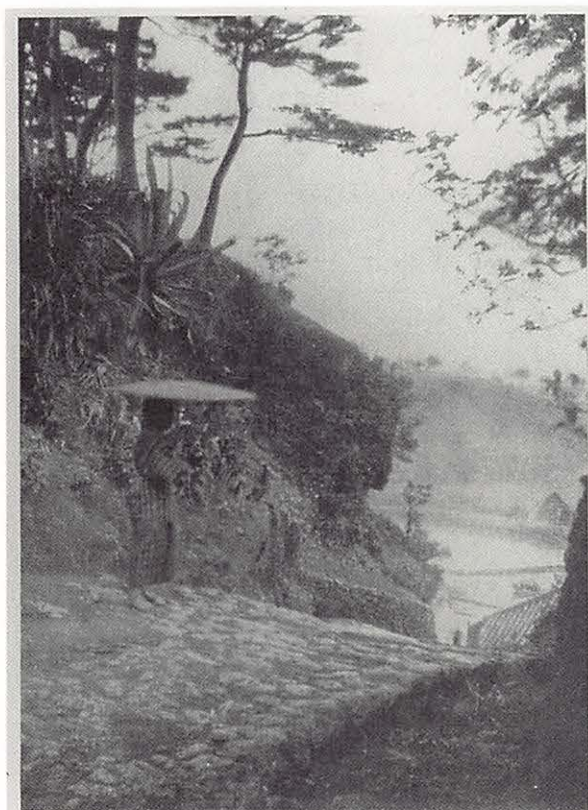


20 南鵬

21 沖縄写真帳

2冊 32.5×29cm

1927年（昭和2）に沖縄の風物を撮影した2冊の写真アルバム。ドイツ語で撮影場所を記しているが、撮影者に関する情報は未確認。東京や鹿児島が数枚含まれているが、首里・那覇・糸満・嘉手納・名護など沖縄の名所や風景・人物がほとんどを占める。東（あがり）のアザナ（物見）から首里城正殿をとらえた興味深い写真や、当時の沖縄のリーダーであった尚順（松山王子）を映した1枚もある。中部関係では比謝川や嘉手納を撮影したものが数点含まれており、川岸に帆をおろして停泊する山原船の姿が見える。（高良倉吉）



Bergweg bei Katena.

嘉手納近くの山道



Flußlandschaft bei Katena auf Okinawa.

沖縄の嘉手納近くの川の風景（比謝川）



Rückansicht des alten Palastes in Shuri.

首里城正殿の裏

22 栗原自然科学研究所移民調査写真帳

26×37cm

沖縄は移民県で、出移民数は広島県に次いで全国第2位であるが、海外在留者数と現住人口の対比率の「出移民在留者率」では戦前沖縄が全国一である。数値でみると10人に一人が移民したことになる。「栗原自然科学研究所移民調査写真帳」は、昭和14年（1939）に栗原自然科学研究所歴史調査班が調査をしたブラジルのアンナ・ディアス、ペルーベ、イタリリー、ペードロ・デ・トレードの調査写真帳で、その中に多くの沖縄出身者が含まれている。写真帳にはコロニアの風景や生活の様子をうかがわせる写真以外に、一家毎に家族全員の写真撮影が行われ、家族の本籍地、家長以下の家族構成、入国（ブラジル）期日、移民船舶名、配耕地等が詳細に記されている。（赤嶺守）

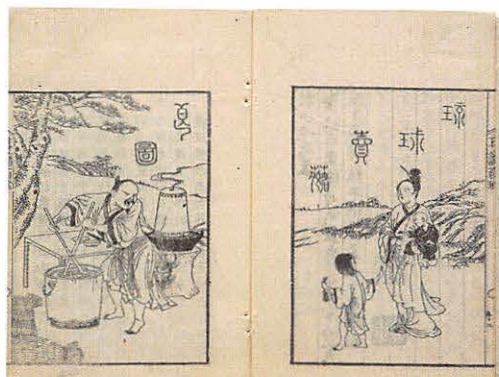
かん しゅ ひやくちん
23 甘藷百珍

1冊 38枚 21.5×14.2cm 木版 線装本 浪速 珍古楼
主人輯

寛政己酉中秋上浣の日付の序文がある。寛政己酉は1789年、中秋上浣は旧8月上旬。序文の次に見開きで「琉球売藷之図」がある。琉装之婦人が子供を抱き、幼児を従えている。その先には、甘藷売りの男が、台の上に皿を並べ、甘藷を蒸かしながら、甘藷を洗っている。

内容は、甘藷のさまざまな料理法である。料理法によって、これを奇品（一～六三）、尋常品（六四～八四）、妙品（八五～一二二）、絶品（一一三～一六三）の四つに分類し、それぞれの調理法と味を記録している。

（上里賢一）



23 甘藷百珍

りゅうきゅう ゆう き あいかつ とし なか はい が ちよう
24 琉球游記（相川俊孝俳画帖）

1冊 24×18cm

相川俊孝（1899～1940、石川県出身）は、大正期を代表する詩人の一人で、現代詩『万物昇天』を新詩壇社より刊行（1924）している。前衛的な詩人で、乙骨明夫は『現代詩人群像』で「直進の詩人」と評している。父は木彫家、弟は画家、号は白光。自らを「放浪詩人」と称し沖縄本島各地を巡っている。「琉球游記」の中で「かつて憧憬の琉球国に遊ぶ、まこと南海の絶島なれば其の風物人情自ら内地のものと異り」と強烈な刺激をうけた様子を記している。前衛的な詩人の目を惹いた戦前の沖縄の風景・人物が描きだされている。（赤嶺守）

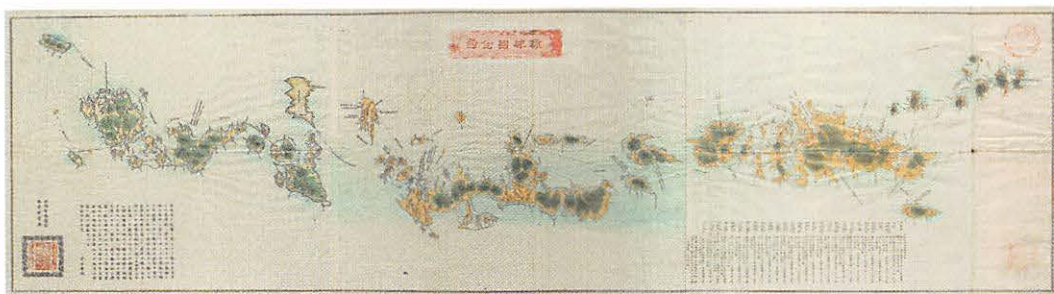


24 琉球游記

どう こくりゅう きめいこくぜん どう す あお ましゅう
25 銅刻琉球国全島図 / 青江秀〔著〕

1枚 37×131.5cm 1874（明治7）年 7月刊

本地図は小林居敬・青江秀・米本少蔵の共著『琉球藩史』の付録として収められたもので、明治期には、こうした細密描写が可能な銅刻の「刷り物」が多く刊行されるようになる。明治6年に刊行された大槻文彦の「琉球諸島全図」と共に、よく知られている地図である。鹿児島に属していた奄美諸島を含み、そして「間切」や航路、港の「広狭浅深表」を記入している点を地図の特徴としている。青江秀は『薩隅煙草録』の著者で、郵便はがきを編み出した人物として知られている。（赤嶺守）



大正期の沖縄 -E.R.ブールのガラス写真- パネル展示



アダン漂白の水槽

新しい産業として、アダンの繊維から帽子を製造しています。この帽子は有名なパナマ帽に似ており、その良質で安い代用品となっています。繊維は工場で準備されて漂白され、それから分配されて家々で手で織られます。繊維はこれらの水槽で漂白されます。



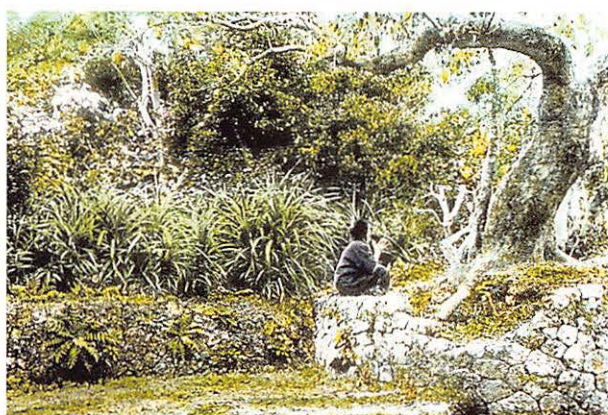
野国総管の墓

これは最古の墓の一つで、たまたま著名な琉球詩人の眠る場所なのですが、こうした墓は丘の中腹をくりぬいて造られています。これらは、多分、さらに古い洞窟墓の名残でしょう。(野国総官を著名な詩人というのはBull師の誤解か。)



村芝居の舞台

夏の収穫が終わった後、砂糖作りが始まる前の満月の日は、田舎の村々にとって一種の芝居を催す絶好の時です。これは純粋に共同体の行事です。衣装や小道具は村あるいは青年会の所有物で、演じるのも村人たちです。



聖なる木の下で祈願する女性

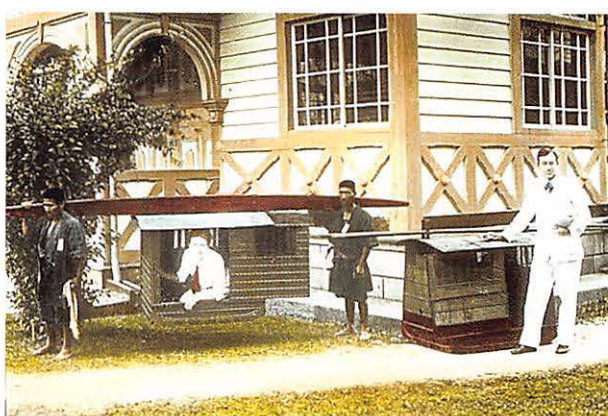
大きな節くれだった木々や奇怪な形をした岩などは精霊のすみか、あるいは神性のあらわれと見なされるようになりました。



琉球の村の製糖場

これは琉球のある村の製糖場です。長いさおの先にいる馬によって動かされ続けている鉄のローラーの間にさとうきびを通すことによって汁がしぼり出されます。写真中央に見られる瓦葺き屋根の家々でこの汁から水分を蒸発させます。

※解説はブールの英文解説を和訳したものです。



(琉球) 駕籠

日本政府は道路の建設者としてローマ帝国に匹敵し、日本支配下の琉球にもたらされた最大の改善の一つが、島々の隅々まで張り巡らされた素晴らしい道路システムなのです。車輪のついた乗り物が間もなく至る所に進出できるようになり、この写真に見られるような古風な駕籠はすぐに完全に捨て去られてしまうことでしょう。アール・R・ブール師は右端にいて、ブール夫人は駕籠の中にいます。

沖縄関係電子化資料紹介

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>

「沖縄関係資料検索システム」

<http://opac.lib.u-ryukyu.ac.jp/kyd/index.html>

琉球大学附属図書館が所蔵する沖縄関係資料の目次情報及び書誌・所在情報を検索することができます。



「伊波普猷文庫画像データベース」

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/iha/index.html>

「おもしろと沖縄学の父」といわれる沖縄学の先駆者伊波普猷の旧蔵資料（伊波普猷文庫）を高精彩画像化して収録しています。

「琉球語音声データベース」

<http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/>

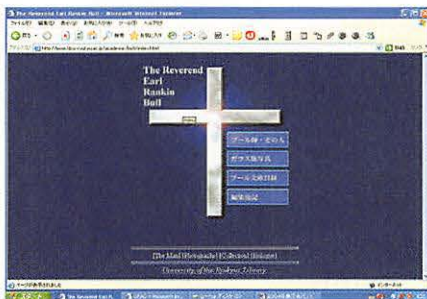
琉球方言の単語と用例に音声をリンクし、データベース化。方言と標準語の両方から検索できる他、品詞別検索、意味分野別検索が可能で、その音声を聞くことが出来ます。今帰仁方言と首里那覇方言の2つから構成されています。



「ブル文庫ガラス版写真」

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/academic/bull/index.html>

1911年、アメリカのメソジスト監督教会から沖縄に派遣された宣教師E. R. ブールが収集した資料の紹介と、当時の貴重な写真などを画像化して収録しています。



「仲宗根政善言語資料画像データベース」

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/iha/index.html>

<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/seizen/>

琉球列島各地の方言を調査研究した著名な学者仲宗根政善の手書きの原稿、調査ノート、資料、日記などを画像化して収録しています。

「仲原善忠文庫画像データベース」

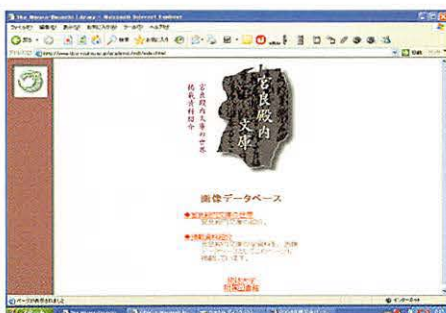
<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/zenchu/>

琉球古歌謡集である「おもしろさうし」の研究や琉球の歴史研究に大きな業績を残した沖縄学の研究者仲原善忠の旧蔵資料（仲原善忠文庫）から沖縄関係資料を画像化して収録しています。

「宮良殿内文庫画像データベース」

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/academic/mdl/index.html>

八重山郡石垣市の旧家宮良家に代々継承された、近世八重山行政関係資料を主体とする古文書資料を画像化して収録しています。



「矢内原忠雄文庫植民地関係資料データベース」

<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/>





琉球・沖縄の歴史と文化を探索-琉球大学附属図書館貴重書展-

主催：琉球大学附属図書館

共催：北谷町立図書館

後援：北谷町教育委員会

期間：平成18年10月27日（金）～11月2日（木）

場所：北谷町立図書館

企画：琉球大学附属図書館研究開発室

親川兼勇（琉球大学工学部教授）・高良倉吉（琉球大学法文学部教授）

上里賢一（琉球大学法文学部教授）・赤嶺守（琉球大学法文学部教授）

前城淳子（琉球大学法文学部教授）・豊見山和行（琉球大学教育学部教授）

琉球大学附属図書館展示委員

堀内真也・桑原勇夫・高橋輝・松原敏夫・金城真理子・山里道子・古謝久美子

伊波ひとみ・大城登樹子・大谷周平・（仲村武則）